新年文芸特集

詩の部

たたかいのとき

四山　村中利行

朝は　すでに始まっていた
星の　刺すような輝きと
うち震える　外灯の下に
社宅は　霜をのせ
黙りこく　押しあっている
台所に　灯がつき
コトコトと　庖丁がなり
味噌汁の　にほいが
外に　ながれ
一番方が　出勤して
夜汽車の　走り去る音が
間近に　せまり
新聞配達の　少年が
吐く息もあらく　小走りに去り
牛乳配達の　親父が
自転車をとめ　牛乳を配っても
太陽が　輝くのに
まだまだ　間があるというのに
闇の底は　もう動いていた
その底のなかで
ショベリングに
汗をしたたらせ
鉄柱を　肩にくいこませ
「ヤー、チョイ」で　引く
原動機に　息をあらがせ
コオリを　かじり
マイトの　ドーンという
響きと　揺れに
ふっと耳をやり　仕事を始める

ゼニにならん
仕事が　きつうなった
転場が　面白うなか
手を休め　息をつき考える
退転　大阪　名古屋　再就転
考えが　転がり
坑夫はおそれ　歳月をめくる
これで　いいのか

十年の　重みをめくる
坑夫の　少なくなった炭鉱の
坑夫の　いなくなった炭鉱の
そこから　湧きでたうた声に
坑夫をつつんだ　あの熱気に
坑夫は　生きる方向を
つかもうと　腕を動かす

十年　前
坑夫は
焚火を囲み夜をあかした
首切り状を　燃やし
かあちゃんらが　デモる
会社が　坑夫を裂いた
久保清が　殺され
涙が　怒りとなった
みんなが　生きてきた
瞳が　かがやき
生き生きと　急がしく
一日が　短かくなった
ホッパーに
ビニール小屋ができ
日増しに　ふえていった
オルグが　全国からきた
カンパが　ぞくぞくときた
頑張ろうを　よく歌った
ホッパーパイプも　作った
笑いや　哀しみが
ひとりのもので　なくなった
焼酎も　うまかった
安保闘争が　三池をつつんだ
アイクが　沖縄から帰り
岸が　やめた
首切りを　はねかえすことが
できなかった　けど
坑夫は　一年足らずの間に
熱い　かたまりが
胸の奥に　息づき
坑夫の　歩く道が
明るく　たしかであった
安保共闘の　広がる力の壁に
坑夫の　腕もあった
国会へ　つながる道へ
社会党　共産党
労働組合の旗が
数十本　数百本つらなり
フランスデモが　銀座をうめた
この力が　鮮やかに
燃えている
この　数年の間に
なだれ閉山　爆発と
坑夫が　炭鉱を追われ
ハンパにされ　タタキ殺され
しぼりとられ　いつの間にか
生気をなくした　眼に
もう一度　この力が
よみがえる　日を
坑夫は　辛抱強く耐えた
ときが
あつい　うねりとなって
せまって　きている
十年の　短かい歳月に残る
坑夫の　熱気を待っている
七〇年への　坑夫は

おれたちの一九七〇年だ

宮浦　高椋竜生

かなしみと
いたわりを忘れた
合理化と
戦争屋どもが
目に見えぬ凶器で
ひそかにソンミで虐殺し
沖縄を
日本を
黒い渦に巻きこみ光を閉ざし
人間を叫びつづけるなかまの
くびを切り
アジアから
いっさいのしあわせをもぎとり
正しさを踏みつぶす
血税で働くものをいじめぬく警
察と
自衛隊を増強し
トロツキストをたくみにつかって
民衆を弾圧する
反民主主義政府
世の中をつくりかえる力は
ゲバではない
ぬくもりのある　腕を
闇の底から　準備する
やがて
きってはなされる　朝の大地へ
坑夫は　たしかな
ハガネを　持って
戦列に　加わる

1969・12・21

働く大衆だ
いま
そこから、
おれたちの一九七〇年が
らんらんと生きもののように
目をかがやかし
熱気をおびながら
大きなうねりとなって
立ち上がってくる
ひとりひとりが
この目でたしかめよう
核かくしの
最高機密を
力には力
合理化と戦争をつなげる
太平洋のかなめ石となり
アメリカのアジア基地となる
ヒモを断ち切り
いのちをまもる転場から
闘いを巷に繰りひろげ
手をつなぎあい
爆発する若い力で
一気に
安保を押し潰そう

ぼくのおうち

ひらたよういち

ぼくは、がっこうからかえってきでも、おかあさんがいないからさみしい。
おとうさんも、おかあさんもいたらいいなとおもいます。
（お父さんは平田光男さん）

ふるさとを返せ

港務　柿坂敏

すみきった空に
赤トンボのとばない空は
もう、ふるさとの秋の空ではない
よもぎの薫る清流に
メダカのむれの消えたせせらぎは、
もう、ふるさとの春の小川ではない
たんぼの小道で出合う
アイシャドーを粧した娘には
もう、見知らぬ旅人に
小腰をかがめる純朴さはない
俺達はたしかに
だれかに
ふるさとの自然を、ふるさとの心を
うばわれたのだ
ふるさとを従属して
灰色の工場へ通ずる
この舗装道路は決して
ふるさとに幸せを運ぶ路ではなく
幸せを運び去る路なのだ
うばわれたふるさとを返せ
うばわれたふるさとの心を返せ
たわわに実る柿の枝に
渡り鳥の鳴く
平和なふるさと返せ
冬の夜のいろり火のように
いつも暖かった
ふるさとの心を返せ

一年が過ぎた

宮浦　平田光男

すわ川のほとり
連帯感をもって
宮浦鉱坑口移転反対
果敢に闘って一年
初めて三川鉱へ入坑
ここで
四百五十八名が殺され
八百名のCO患者が
つくり出された所
会社は
そんな事は平気だ
坑口を統合し
人車は
過密ダイヤ
坑車はうなりを立て
走り回る
切羽ではカッターが
労働者をせせら笑って
炭壁を切りまくる
露出天井が広がっていても
カッターはいっている
ものがいえぬ労働者を
早くつくり上げ
軍備を拡大し
徴兵制度をつくり上げたら
もう俺の天下だと
今日も母ちゃん達が
すわりこみを続けていた
目貫の前を
黙って通る
しかし忘れてなるものか

10年前「安保と三池」で闘つたとき、1日の24時間が足らなかつた。そんな闘いの中で、仲間たちといつしよに食つた飯のうまかつたことはどうだ。